

同志社大学

2013年度 個人研究費研究経過・成果報告書

2014年 2月 4日提出

所 属	職 名	氏 名
心理学部	教授	中谷内 一也
研 究 題 目	災害スクリプトに潜む脆弱性の検討と対処行動の促進、リスク認知上の波及効果 (科研費研究・基盤研究(B)24330189 と同じ)	
研 究 成 果 の 概 要	<p>本研究課題には以下に示す2つの目的がある。ひとつは災害時における一連の行動やできごとについての主観的な予測、すなわち災害スクリプトを調査によって引き出し、そこに示されるサバイバル上の脆弱性を同定した上で、理論とエビデンスに基づいた対処行動促進プログラムを設計、実施することである。ふたつはそのようなプログラムの参加者となり、対象とする災害のリスクを軽減させた個人が、他のさまざまなリスクに対する認知や行動をどう変化させるのかを検討することである。つまり、特定の災害に対処するための行動促進プログラムの直接的な効果に加えて、リスク認知の変容を通じた波及効果も検証し、総合的なリスク対策としての効果を説明するモデルを構築することが本研究の目的である。</p> <p>本年度は上記目的のうちの前半部分、すなわち対処行動促進プログラムを設計、実施し、その効果を検証した。実験では、解釈レベル理論に基づき、具体的に防災・減災のための用品に接触させる群と、抽象的に防災・減災用品についての効果を説明する群を設けた。その結果、仮説通り、具体的事物に接触し、解釈レベルが低下した条件での防災・現在用品への選好が向上する傾向が認められた。一方、解釈レベル理論では、低次解釈は心理的距離の低下、すなわち、災害リスク認知の高まりをもたらすはずであるが、そのような結果は認められなかった。今回の知見は、認知と行動の一貫性に懐疑的であるリスク認知パラドクスに整合する結果であり、災害対処行動を目的変数とする研究においては、行動をコントロールする新たなプロセスを模索する必要性を示唆するものであった。</p>	